

## 故郷の桜

安藤晃一

疫籠りの淀んだ気分一掃にと、思い立って「幸手の桜」を観に出かけた。満開の絶頂期であった。日光街道沿いのこの宿場町は、実は私が幼少期を過ごし、思い出の詰まった故郷である。俳句の「花の雲」という季語を体現したような美景に感動を覚える。埼玉県の北東部の果てが幸手市の地理である。利根川水系の中川沿いの権現堂堤に千本程の桜並木がある。堤防の二段構造に、ぎっしりと植えられた桜、その花の層故に、遠景の眺めは絶景であった。「花の雲」がうねり、土手下の真つ黄色な広大な菜の花畑を抱く様は迫力そのものである。

土手に上がって見た。土手の傾斜に沿って這うように低く垂れ下がる花の風情が素晴らしい。時節柄、宴会は禁止、川を眺める坂には、洋風の立派なベンチがズラリ、高齢者達が一服する心温まる光景があった。

戦前から有名であった名所は、戦時下には明治天皇休憩処の数本を除き、全て伐採され供出された。土手に陸軍の高射砲陣地が築かれ、5歳で終戦を迎える幼児を興奮させる戦車の轟音が響いていた。私の中学生時代の桜は未だリハビリ中であった。高校は浦和市に通い、大学、企業生活も東京となり、可成りの部分を海外で過ごすなど故郷は随分遠くなっていた。その桜を観るのも六十年ぶりである。現在、県内、随一、全国七位の花見所であると聞く。

帰路、懐かしい道を通り、マ、医院の事が想われた。あつうごとか、マ、医院が大病院の体で眼前に現れたのだ。4歳の頃、八幡神社での出征兵士の壮行会へ母に手を引かれて行ったときのこと、母の手にした日の丸の小旗の尖った竹竿が、やんちゃに跳びまわる幼児の眼に突き刺さった。その頃、父親は単身北支の済南に駐在中であり、母の悩みは想像に難くない。連日この医院に通い、女医先生の弛みない治療のお蔭で快癒したのだった。越谷に住む兄に幸手行きの話をする。マ、先生なら毎日のように遊びに来るよ」。女医さんのご子息、兄よりも高齢の方である。